

博士學位論文審査報告書

2017年2月13日に開かれた石嘉君の博士學位論文『近代江西社会經濟典型与変遷』の最終審査会において、本人との質疑・応答を行ったうえで、論文審査委員3名が本論文に対する審査を実施した。

本論文が企図する学問上の位置付けは、以下のとおりである。すなわち、過去の研究史の通弊として、歴史發展の流れを単線的・直線的に説明して、その多様性や論理的方向を軽視する一方、共産党史研究を歴史研究の主流に据えるという学問的偏向の影響を受けて、古くからの革命根拠地である江西省ソビエト区の研究を過度に重視するという視野の狭さが存在している。他方、20世紀80、90年代に入るや、近代の江西省に関する本格的な研究が經濟史の分野で開始され、21世紀にはその考察範囲が狭義の經濟史研究に止まらず、經濟・政治・文化・社会生活等の広い研究に及んでいる。個別の研究課題としては、交通史・陶磁器史・製茶業・製糖業・教育事情・都市社会等の広範な領域に研究が広がっている。しかし、既存の研究はその大半が国内資料のみに依拠して考察をすすめており、外国人によって調査・作成された膨大な国外資料に十分眼を通していないという通弊がある。

本博士論文の構成は次のとおりである。

緒 論

第一章 近代日本在江西省的社会經濟調査

第二章 清末民国期江西省概況

第三章 近代江西省的交通狀況

第四章 清末民初景德鎮制瓷業研究

第五章 清末民初砂糖業

第六章 清末民国江西省的烟草業

結 語

第一章では、戦前期日本の在華調査機関を概観してのち、九江領事報告、興亜院調査、満鉄調査、実業団体の調査、東亜同文会や東亜同文書院（大学）の調査資料を幅広く調査し、とくに東亜同文会編『支那省別全史』の重要性を高く評価している。その特徴としては、一部の調査は純粋な学術研究の成果であり、日中学術交流に一定の貢献をしているが、日本当局の制約によって政治的・軍事的・経済的な色彩が濃厚であったと評価している。第二章では、清末民国期江西省の全体像を概観している。第三～六省において、個別産業史として交通史、景德鎮の陶磁器史、製糖業、煙草産業について取り上げている。これ

らの個別産業史については、中国側による調査記録に限られているという問題意識から、日本人による調査記録を有力な資料として考察をすすめている。結論においては、日本人の手になる江西省社会調査の意義を改めて確認するとともに、外国勢力の強い圧力を受けて伝統的な社会経済が変容していく状況下で、江西省の伝統的経済を復興する方策として、伝統農業の振興、交通運輸の改善が提唱され、政府が郷村工業を提唱し、特産品貿易の振興を重視してきた事情を指摘している。

従来中国の近現代史研究においては、共産党史を中心とした教条的な歴史感が風靡し、社会経済史の分野でも唯物史観に基づいた政治経済学の観点が突出していたが、1980年代以降社会史・文化史を加味した多様な実証研究の成果が出現しつつある。本博士論文もこうした新しい研究動向を代表する業績であると評価することができる。石嘉君は江西省革命老区の革命烈士の子孫であり、共産党史中心の歴史教育を受けてきた世代であるが、実証研究を基礎として新しい研究業績を積み上げるといふ研究の作風を身に着けている。

石嘉君は愛知大学に滞在中、豊橋図書館が所蔵する霞山文庫を中心として、戦前期日本の中国に関する各種の調査報告を幅広く調べており、本論文はその調査結果を踏まえて、江西省の社会経済研究において、外国資料、とりわけ日本語資料の重要性を強調している。中国と日本の文献をともに利用するという研究スタイルは、従来の研究には見られない長所として高く評価できる。

他方、東亜同文会編『支那省別全史』への依存度が高く、日本の他の調査機関による各種報告書の検討がなお不十分であるという印象を受ける。また、対日抗戦前の江西省は日本よりイギリスの影響のほうが強いと思われるので、外国資料の重要性を強調するという観点からみれば、英文の外交文書・貿易文書・教会関係文書・報刊資料の意義が検討されていない点は、今後の改善点として指摘できよう。

本博士論文は、新しい歴史分析の観点がいくつも散りばめられ、要領よく文章がまとめられているが、なお個別産業史のレビューという性格が強いので、今後は研究の問題意識とその研究対象をさらに明確にして、より深化した研究成果の発表が期待される。

論文審査委員の間で検討した結果、本論文は着想が斬新で、利用した資料が多岐にわたり、中国側・日本側の資料を幅広く読みこなしており、論文としての全体的構成がしっかりしているとの共通認識を得た。したがって、本論文は博士論文~~部員~~としての十分な資格を備えているという結論を下した。